
初恋終時・改

舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋終時・改

【Nコード】

N9241Y

【作者名】

舞

【あらすじ】

初めての恋が終わる時の書き直し版です。
前の消そうと思ったんだけど、消すのはサイトに良くないみたいなので、消すのをやめて新しく書きました。

平次が「ちよつと東京に行つて来る」と言つて出掛けて一カ月が経とうとしていた。

「服部、何しに行つたんやろなあ？」

「分からん。電話も繋がらんし……。自分が受験生やってこと忘れとるわ絶対！」

平次が東京に行つてから連絡が取れなくなり、アタシは平次の事が心配で何もかも手に付かなくなっていた。
授業も聞く気になれず、ボーッと窓の外を眺めていたら、携帯の呼び出し音が聞こえてきた。

「こら！授業中は切つておきなさい！」

先生が何か言っていたけど、そんなのお構いなしに電話に出た。それが平次専用の着信音やったからや。

「もしもし？平次？あんた何やってんの！？」

『和葉……。今直ぐ、東京に來い……。』

「えっ……。？」

怒ろうとしたけど、直ぐに怒れなくなつてしまった。平次の声に元気がなかったから。

「どしたん？なんかあつたん？」

『いいから、東京に來てくれ……。』

「……。分かつた……。」

早速し、急いで準備をして東京に向かった。
東京に着いて言われていた住所にたどり着いた。その家の表札には、
工藤って書いてあった。

ピンポン

「来たか・・・。」

包帯や絆創膏だらけの平次が中から出てきた。

「平次・・・・・・・・。」

想像以上の平次の元気の無さにどうしたらいいのか分からなくなっ
てしまった。

「平次・・・いけるん？その怪我。」

「怪我なんか治るからどうでもええんや・・・。」

「どうでもって・・・。」

「工藤はもう、帰って来んのやから・・・。」

平次の表情から言葉の意味が分かって、黙り込んでしまった。

「ちゃんと制服持って来たか？」

「う、うん・・・・・・・・。」

やっぱり、そういうことやね・・・。

【あと、制服持って来いよ。】

昨日の電話で平次が制服を持って来いと言ったのは、工藤君のお葬式があるからや。

お葬式の準備は出来ていたらしくて、直ぐに向かうことになった。その間、アタシも平次も一言も話さなかった。

平次はずっと黙ったまま。泣き崩れる蘭ちゃんたち。

アタシは状況が呑み込めずにいた。

やってそこに新一君の姿が何処にもなかったから・・・。

工藤君が居るはずのところに、コナン君がいた。

「平次……その……」

アタシにはなんで工藤君やなくて、コナン君が居るんか分からなかった。

平次はアタシが何を言おうとしたのかが分かったのか、話出した。

「江戸川コナンは工藤新一やったんや……」

「……それってどういうこと？」

平次の話やと、コナン君と哀ちゃんはある組織の薬で体が小さくなった工藤新一君と宮野志保さんやったらしい。そしてその組織を潰そうとしたときに、撃たれて工藤君は亡くなったらしい。平次はオレのせいやって言ってた。アタシにはその場の状況が分からんから、なんで平次が自分を責めてるんか分からなかった。やから何も言ってあげられなかった……」

「平次……」

平次は目を合わせてくれなかった。

平次の隣で何も出来ずにいたら、哀ちゃんが話し掛けてくれた。

「貴方、何があったか知りたいんじゃない？」

「うん……」

哀ちゃんについて、人気のないところに来た。

「・・・工藤君は服部君を庇って撃たれたの。」

「平次を・・・？」

「そう、服部君が奴らに見つかってね。撃たれそうになったのを工藤君が庇って・・・。」

「そうやったんや・・・。」

「彼、撃たれて直ぐに言ってたわ。」

【工藤っ！！なんでオレなんか庇うんや！！】

【おめえ・・・大事にしなきゃ・・・いけねえもの・・・ちゃんと守れよ・・・。】

【工藤！！】

「きつと工藤君、貴方のこと言ってたのよ。」

「アタシ？・・・アタシが電話したからかな・・・？」

「電話？」

「うん。この前な、蘭ちゃん家に電話したんやけどコナン君が出てん。」

【ごめんね、和葉ねーちゃん。蘭ねーちゃん今お風呂入っててさ・・・和葉ねーちゃん？どうしたの？泣いてるの？】

【コナン君・・・平次が・・・お前の考えとることなんか全然分からんし、知りたいと思わんわ】って・・・。】

【平次に「ちゃんが、そんなこと・・・。」】

【アホやねアタシ・・・。平次がアタシのこと見て無いんなんか前から分かったのに・・・。」】

【和葉ねーちゃん・・・。」】

【ごめんな。今日のことは忘れて・・・。」】

「アタシが電話で平次のこと言っただから、平次が死なないようにって・・・。」

「貴方のせいじゃないわよ。彼は彼の意味で服部君を庇ったの。」
「うん・・・。」

誰のせいでも無く、悪いのは全部その組織ってやつ。でもアタシは泣き崩れる蘭ちゃんや、自分を責めとる平次を見て、自分があんな電話をしなればと後悔した。

「あの・・・組織はどうなったん？」

「警察の力もあって、崩壊したわ。」

「そっか・・・。」

「でも工藤君の死は大きすぎる代償だったけどね。」

「・・・。」

蘭ちゃん、平次・・・大丈夫かな？アタシには何が出来るだろう・・・。

蘭ちゃんはずっと泣いていた。新一君と最期のお別れをした後も、蘭ちゃんの涙が止まることは無かった。

「和葉ちゃん……。新一いなくなっちゃたよ……。コナン君も……。わたし、独りぼっちだよ……。」
「蘭ちゃん……。」

今は何を言っても違う気がして、蘭ちゃんに言える事はアタシには何もなかった……。それは平次にも同じやった……。

平次とアタシは蘭ちゃん家に泊めてもらうことになった。蘭ちゃんは家に帰ると部屋に閉じこもって出てこなかった。

平次は蘭ちゃんの部屋の前で立っていた。アタシはその様子を少し遠くから見ている。

「ねーちゃん……。工藤のことやけど……。」

「何？」

「ほんまに悪い……。オレがあの時」

「謝らないで！……。謝られても、新一は帰って来ないんだから！
！」

「そうやな……。」

辛そうな平次の顔を見て、泣きそうになった。でも泣きたいはずの平次が泣いていないのに、アタシがここで泣いちゃ駄目やと思った。

「蘭ちゃん、話があるんやけど……開けてくれん？」
「何？」

ドアの向こうで蘭ちゃんが小さな声で返事をしてくれた。

「アタシ、ちょっと前にコナン君と電話で話したねん……」

少しすると、ドアが開いて蘭ちゃんが入れてくれた。

アタシは電話の内容を話した。

【きつと平次にーちゃん後悔してるよ。ほんとに心配なのに強がっちゃって、そんなこと言っただよ。】

【なんでコナン君は分かるん？】

【・・オレも一緒だから……。】

【へ？】

【オレも強がってほんとの気持ち伝えられてないから……。】

「最初は歩美ちゃんのこと言っとなるんやと思ってたけど、蘭ちゃんのことやったんやね。工藤君、蘭ちゃんのこと」

「そんな……和葉ちゃんが服部君のこと言っただから……だから新一は服部君を庇って……」

「……………」

何も言えなかった。哀ちゃんはちゃうって言うたけど、アタシもそんな気がしてたから。

「ねえ、和葉ちゃん？・・・服部君わたしにちようだい？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9241y/>

初恋終時・改

2011年11月29日19時53分発行